

論点に関する参考資料

I 高等学校から大学までを通じて育成すべき力

コアの要素を含む資質・能力 (イメージ)

高等学校教育を通じて身に付けさせるべきもの

確かな学力

- ア 基礎的・基本的な知識・技能
- イ 基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を解決する力 (思考力・判断力・表現力等)
- ウ 主体的に学習に取り組む意欲・態度

説明する力、議論する力
批判的、合理的に考える力
「創造力、構想力」

社会・職業への円滑な移行に必要な力
市民性

「自己理解・自己管理能力」

豊かな心

- 社会の発展に寄与する態度を養うために必要な「公共心」や「倫理観」
- 「職業観・勤労観」 「主体的行動力」 「人間関係形成力」
社会的責任を担い得る倫理的能力
社会の一員として参画し貢献する意識・態度

- 社会奉仕の精神、他者への思いやり

健やかな体

- 健康の保持増進のための実践力

A 筆記試験や実技試験等による客観的な評価の対象としやすいもの

B A以外のもの

各専攻分野を通じて培う学士力 ～学士課程共通の学習成果に関する参考指針～

(「学士課程教育の構築に向けて」(平成20年12月24日中央教育審議会答申)より)

学士課程の各専攻分野を通じて培う力。教養を身に付けた市民として行動できる能力。

～学士課程共通の「学習成果」に関する参考指針～

1. 知識・理解

専攻する特定の学問分野における基本的な知識を体系的に理解するとともに、その知識体系の意味と自己の存在を歴史・社会・自然と関連付けて理解する。

(1) 多文化・異文化に関する知識の理解

(2) 人類の文化、社会と自然に関する知識の理解

2. 汎用的技能

知的活動でも職業生活や社会生活でも必要な技能

(1) コミュニケーション・スキル

日本語と特定の外国語を用いて、読み、書き、聞き、話すことができる。

(2) 数量的スキル

自然や社会的事象について、シンボルを活用して分析し、理解し、表現することができる。

(3) 情報リテラシー

情報通信技術(ICT)を用いて、多様な情報を収集・分析して適正に判断し、モラルに則って効果的に活用することができる。

(4) 論理的思考力

情報や知識を複眼的、論理的に分析し、表現できる。

(5) 問題解決力

問題を発見し、解決に必要な情報を収集・分析・整理し、その問題を確実に解決できる。

3. 態度・志向性

(1) 自己管理能力

自らを律して行動できる。

(2) チームワーク、リーダーシップ

他者と協調・協働して行動できる。また、他者に方向性を示し、目標の実現のために動員できる。

(3) 倫理観

自己の良心と社会の規範やルールに従って行動できる。

(4) 市民としての社会的責任

社会の一員としての意識を持ち、義務と権利を適正に行使しつつ、社会の発展のために積極的に関与できる。

(5) 生涯学習力

卒業後も自律・自立して学習できる。

4. 統合的な学習経験と創造的思考力

これまでに獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決する能力

これからの目指すべき社会像と求められる能力

(「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」(平成24年8月28日中央教育審議会答申)より)

これからの目指すべき社会像と求められる能力

○我が国の目指すべき社会像

優れた知識やアイデアの積極的活用によって発展するとともに、人が人を支える
安定的な成長を持続的に果たす成熟社会

⇒ 「知識を基盤とした自立、協働、創造モデル」

○成熟社会において求められる能力（学士力）

- ・ 知識や技能を活用して複雑な事柄を問題として理解し、答えのない問題に解を見出していくための批判的、合理的な思考力をはじめとする認知的能力
- ・ 人間としての自らの責務を果たし、他者に配慮しながらチームワークやリーダーシップを発揮して社会的責任を担いうる、倫理的、社会的能力
- ・ 総合的かつ持続的な学修経験に基づく創造力と構想力
- ・ 想定外の困難に際して的確な判断ができるための基盤となる教養、知識、経験
⇒ 予測困難な時代において高等教育段階で培うことが求められる「学士力」

「社会人基礎力」

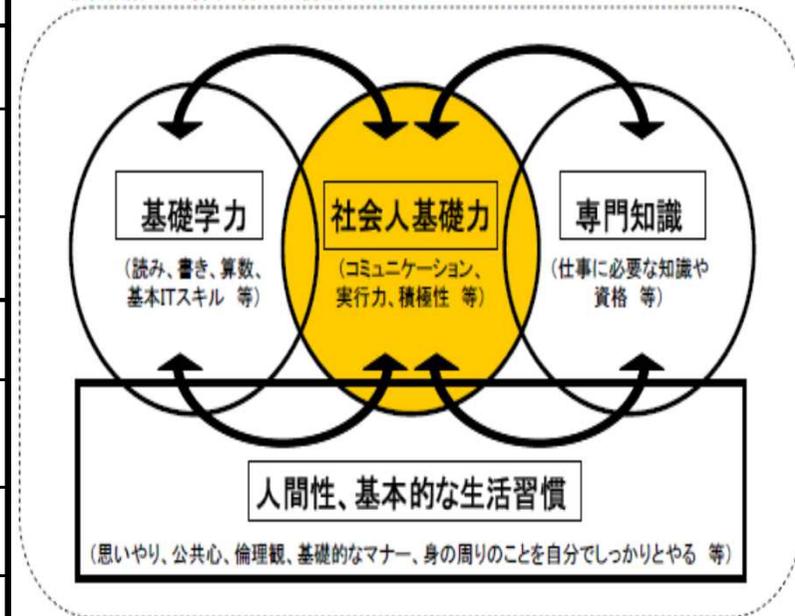
（「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（平成23年1月31日中央教育審議会答申）データ編より）

組織や地域社会の中で多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力

分類	能力要素	内容
前に踏み出す力 (アクション)	主体性	物事に進んで取り組む力 例) 指示を待つのではなく、自らやるべきことを見つけて積極的に取り組む。
	働きかけ力	他人に働きかけ巻き込む力 例) 「やるうじゃないか」と呼びかけ、目的に向かって周囲の人々を動かしていく。
	実行力	目的を設定し確実に行動する力 例) 言われたことをやるだけでなく自ら目標を設定し、失敗を恐れず行動に移し、粘り強く取り組む。
考え抜く力 (シンキング)	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力 例) 目標に向かって、自ら「ここに問題があり、解決が必要だ」と提案する。
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力 例) 課題の解決に向けた複数のプロセスを明確にし、「その中で最善のものは何か」を検討し、それに向けた準備をする。
	創造力	新しい価値を生み出す力 例) 既存の発想にとらわれず、課題に対して新しい解決方法を考える。
チームで働く力 (チームワーク)	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力 例) 自分の意見をわかりやすく整理した上で、相手に理解してもらうように的確に伝える。
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力 例) 相手の話しやすい環境をつくり、適切なタイミングで質問するなど相手の意見を引き出す。
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力 例) 自分のルールややり方に固執するのではなく、相手の意見や立場を尊重し理解する。
	状況把握力	自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力 例) チームで仕事をするとき、自分がどのような役割を果たすべきかを理解する。
	規律性	社会のルールや人との約束を守る力 例) 状況に応じて、社会のルールに則って自らの発言や行動を適切に律する。
	ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力 例) ストレスを感じるがあっても、成長の機会だとポジティブに捉えて肩の力を抜いて対応する。

（職場や地域社会で活躍する上で必要となる能力について）

※それぞれの能力の育成については、小・中学校段階では基礎学力が重視され、高等教育段階では専門知識が重視されるなど、成長段階に応じた対応が必要となる。



資料: 経済産業省「社会人基礎力に関する研究会 -中間取りまとめ-」(平成18年1月)

Ⅱ 高等学校と大学の接続の在り方

高等学校と大学の接続の在り方

(「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」(平成11年12月16日中央教育審議会答申)より)

◆「大学と学生の相互選択」

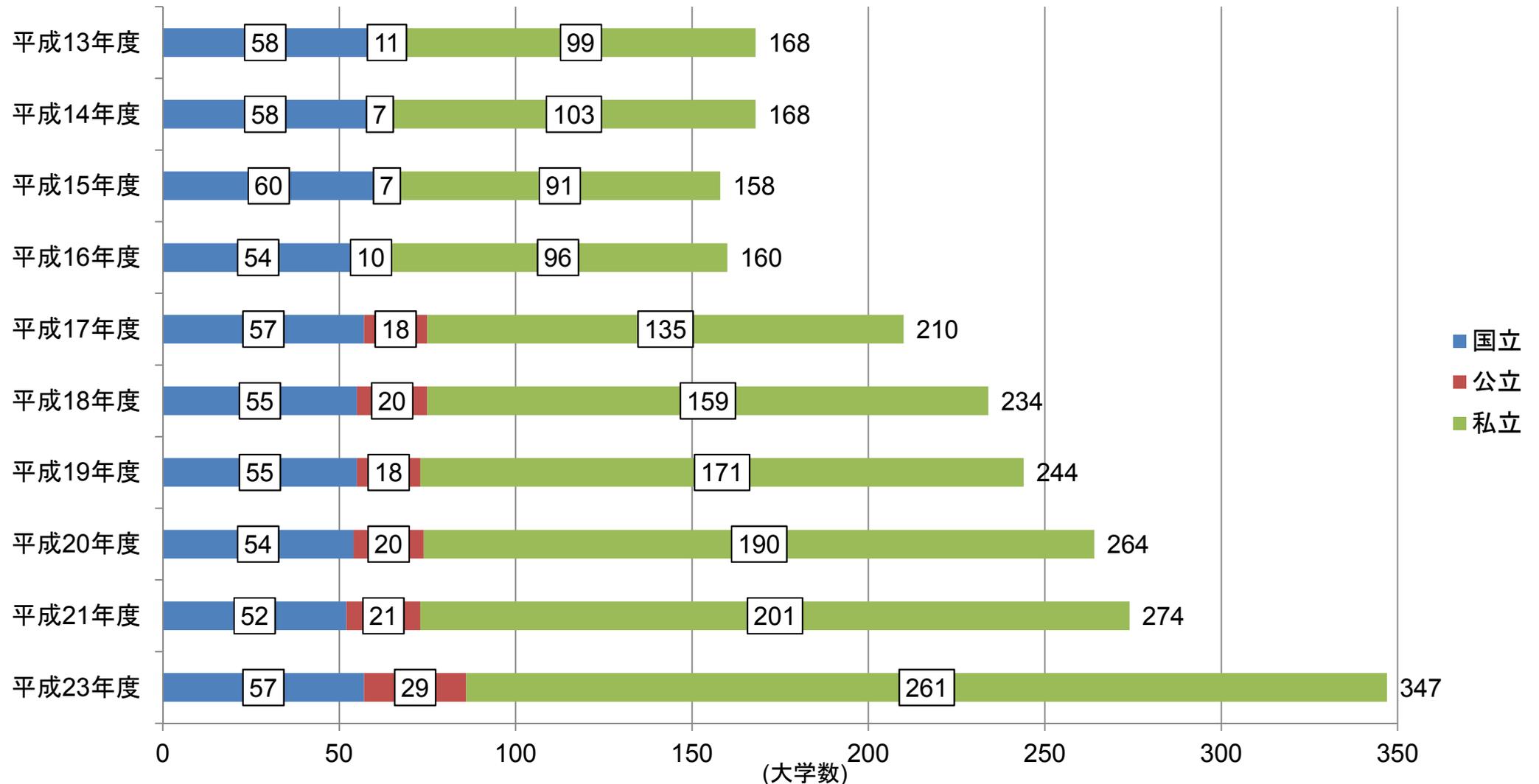
「初等中等教育と高等教育の接続を考えるに当たっては、とかく入学者選抜に焦点が当たりがちである。しかし、高等学校卒業者の約7割が何らかの形の高等教育を受けている状況の下で、これまでのようにいかに選抜するかという視点よりもむしろ、学生がいかに自らの能力・意欲・関心に合った高等教育機関を選択するか、あるいは、大学が求める学生を見いだすか、特に、今後はいかに高校教育から高等教育に円滑に移行させていくかという観点から、接続の問題を考えるべきであって、入学者選抜の問題だけではなく、カリキュラムや教育方法などを含め、全体の接続を考えていくことが必要であり、初等中等教育から高等教育までそれぞれが果たすべき役割を踏まえて、一貫した考え方で改革を進めていくという視点が重要である。

その際、重要なことは、高等学校以下の教育の問題あるいは大学入試の問題といういずれか一面のみから論ずるのでなく、初等中等教育と高等教育がそれぞれ独自の目的や役割を有していることを踏まえつつ、高等学校と大学の両者がいかにしてそれぞれの責任を果たしていくかという観点から検討を行うべきである。その上で、学生が高校教育から大学教育へ円滑に移行できるよう、両者の教育上の連携を拡大するとともに入学者選抜の在り方を改善することが重要である。これらの観点を踏まえ、次のような具体的な教育上の連携方策が考えられる。」

補習授業の実施状況

補習授業を実施している大学数は、平成23年度で347校・全体の約46%であり、平成13年度の2.1倍に増加。

[参考] 補習授業：卒業要件としての履修単位の範囲外の、本来高等学校レベルで実施すべき教育内容を扱う授業等を行うこと。



※平成22年度については、東日本大震災の影響を考慮し、調査を実施していない。

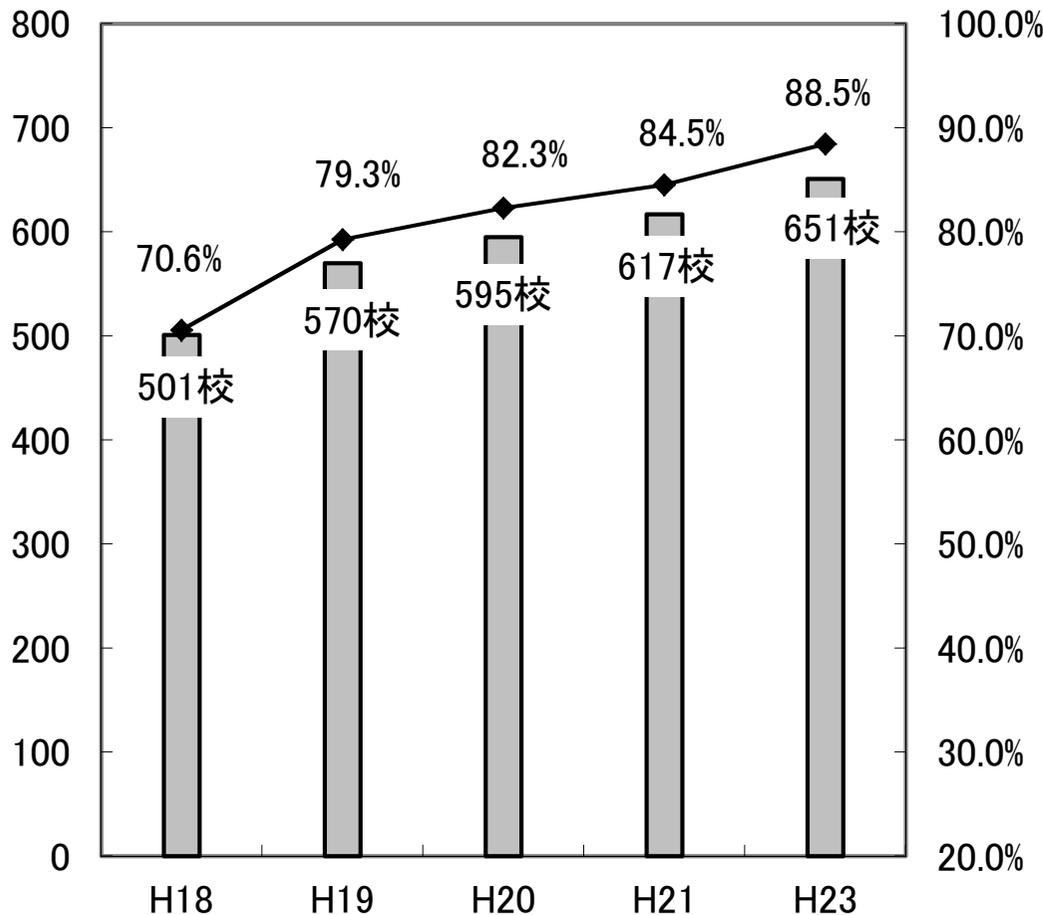
(出典)文部科学省「大学における教育内容等の改革状況について」

初年次教育の実施状況

大学進学者が多様化する中、多くの大学では、大学教育への円滑な移行を図るための初年次教育実施している。

[参考] 初年次教育: 高校から大学への円滑な移行を図るため、大学新生を対象に作成される総合的教育プログラム。新生に大学教育の最初において提供されるものであり、高等学校で学ぶべきことを補完する補習教育とは異なる。

○初年次教育の実施状況(大学学部の状況)



※平成22年度については、東日本大震災の影響を考慮し、調査を実施していない。

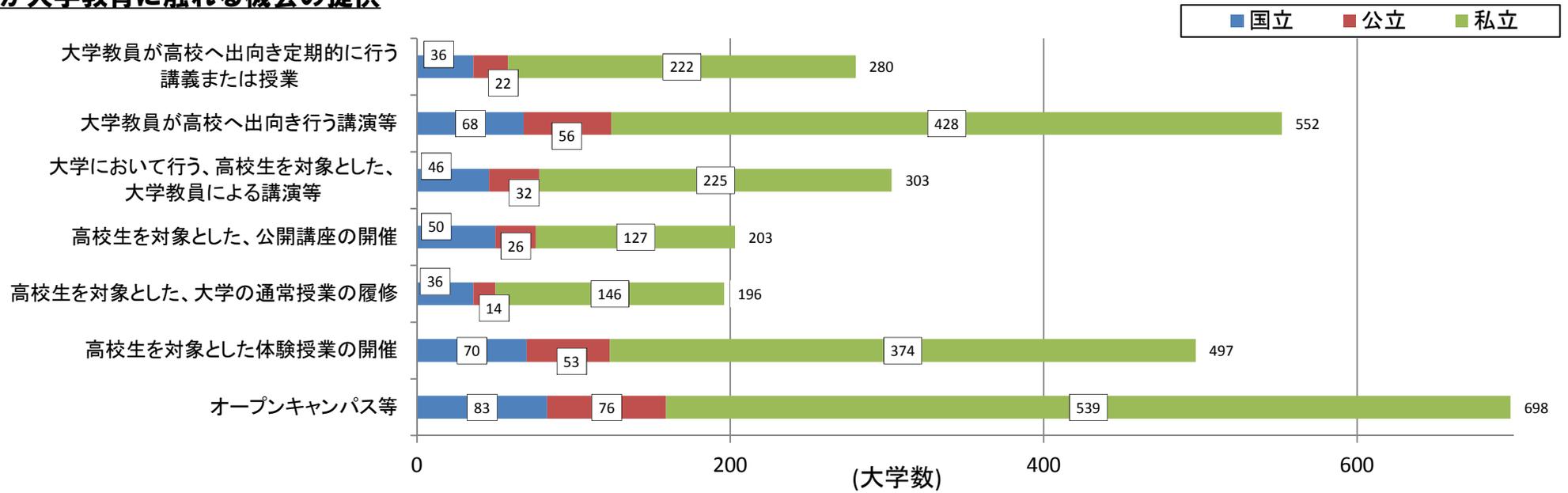
○初年次教育の具体的内容(例)

- レポートや論文の書き方などの文章作法
- プレゼンテーション、ディスカッションなどの口頭発表技法
- コンピュータを用いた情報処理や通信の基礎技術
- フィールドワークや調査・実験の方法
- 情報収集や資料整理の方法
- 論理的思考や問題発見・解決能力の向上
- 学問や大学教育全般に対する動機付け
- 将来の職業生活や進路選択に関する動機付け
- 社会の構成員としての自覚・責任感・倫理観
- メンタルヘルスなど、精神・身体的健康の保持
- 学生生活における時間管理や学修習慣

高等学校と大学との連携の状況

① 高校生が大学教育に触れる機会の提供（平成23年度）

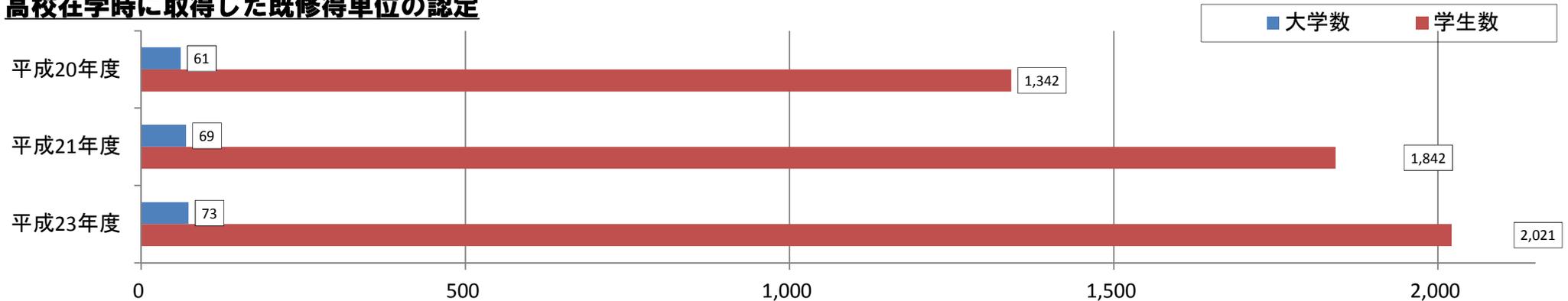
高校生が大学教育に触れる機会の提供



② 入学前の既修得単位の認定

現在、高校生が大学の科目等履修生として大学の授業科目を受講する取組も広がっており、その成果として取得した大学の単位は大学入学後に既修得単位として認定を受けることも可能である。

高校在学時に取得した既修得単位の認定



※平成22年度については、東日本大震災の影響を考慮し、調査を実施していない。

APプログラム(Advanced Placement Program)について

- ・アメリカでは、後期中等教育と高等教育の連携のためのプログラムとして「APプログラム(Advanced Placement Program)」を大学加盟の民間機関が実施。「大学入学試験委員会(College Board)」が実施するAPプログラムが代表的。
- ・ハイスクール在学中の生徒に大学レベルの学習機会を与え、所定の試験に合格することにより大学の単位として入学以前に認定することが可能。
- ・2013年には、全米の約6割のハイスクールでAPコースが開設され約216万人の生徒がAP試験を受験。約8割の大学でAPスコアを活用。

連携

ハイスクール

- APプログラム参加校数(2013年)
 - 公立学校 13,580校
 - 私立学校 3,887校
 - 国内計 17,467校

ハイスクールの
60%以上が
参加

大学の
約80%が参加

大学入学試験委員会(カレッジボード)
のAPプログラム

約216万人がAP試験を受験
(2013年)

大学

- APスコア受付大学数(2013年)
3,665大学

APプログラムは、ハイスクールで大学レベルの教育を提供する教育プログラム

ハイスクールでの大学レベルの授業(APコース)を修了後、全国テスト(AP試験)成績に応じて、進学先の大学で単位認定を受けられる仕組み。全米の大学協賛組織である非営利団体カレッジボード(College Board)が、1955年から実施している。

【プログラムの流れ】

<ハイスクール>

- ・大学レベルの科目(APコース)を選択科目として開設、ハイスクール在籍時に受講者に対して、ハイスクール教員が指導。
- ※各ハイスクール校長に選任された教員がカレッジボードのワークショップ等で研修を受講し、授業を担当
- ※22教科37科目のプログラム実施(2007年)
- 【APコース開設科目ランキング】(2013年)
 1. 微積分 13,559校
 2. 英文学 13,497校
 3. 米国史 12,176校

～ AP試験 ～

- ・APコースの履修者は、カレッジボードの実施するAP試験を受験
- ◆AP試験
 - ・科目別全国テスト 5月実施
 - ・多岐選択と記述式の2形式で出題
 - ・受験は任意
 - ・1科目受験者が最も多く(42.5%)、次いで2科目(21.3%)、3科目(13.1%)となっている(2013年)。

<大学>

- ・AP試験の成績に応じて、個々の大学が取得単位として認定
- ※5段階評価(5が最高)でテスト成績が示され、3以上の成績をおさめた科目は多くの大学が単位認定している(認定は大学の裁量による)。
- ※受験者の約6割が3以上のスコアを獲得(2013年)
- ・APコースやIBなどの高校における大学進学予備プログラムの受講を入学者選抜において重視している大学は83.4%

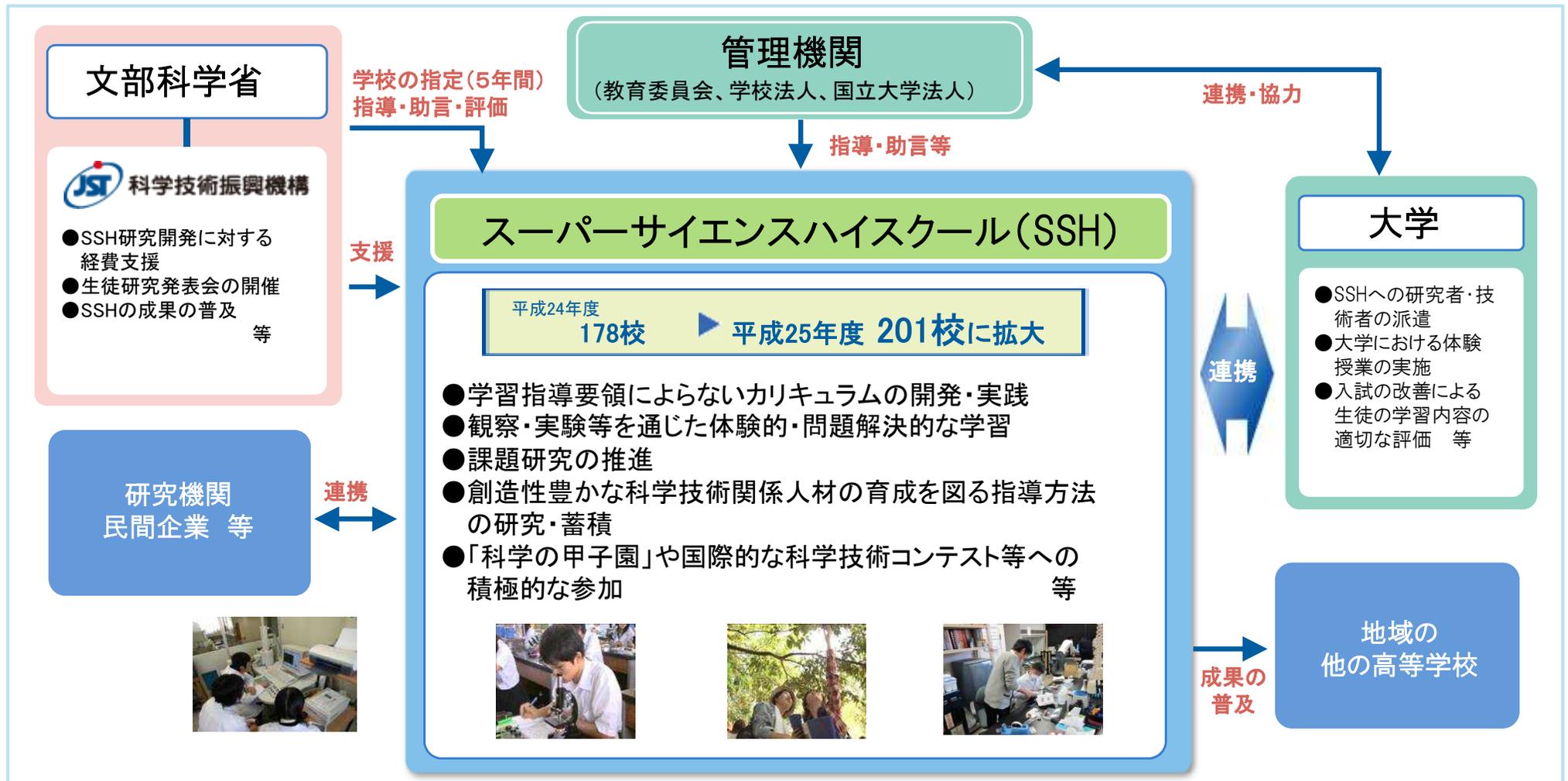
スーパーサイエンスハイスクール (SSH) について

方針

・「科学技術基本計画」(平成23年8月19日閣議決定)
 国は、次代を担う科学技術関係人材の育成を目指すスーパーサイエンスハイスクール(SSH)への支援を一層充実するとともに、その成果を広く他の学校に普及するための取組を進める。

概要

将来の国際的な科学技術関係人材を育成するために、先進的な理数系教育を実施する高等学校等をスーパーサイエンスハイスクール(SSH)として指定して支援を実施



◆**目的**：急速にグローバル化が加速する現状を踏まえ、語学力とともに、幅広い教養、問題解決力等の国際的素養を身に付け、将来的に政治、経済、法律、学術等の分野において国際的に活躍できるグローバル・リーダーを、高等学校段階から育成する。

◆**事業概要**：国際化を進める国内外の大学や企業、国際機関等と連携を図り、外国語（特に英語）を使う機会の飛躍的増加、先進的な人文科学・社会科学分野の教育の重点化等に取り組む高等学校等を「スーパーグローバルハイスクール」に指定し、質の高いカリキュラムの開発・実践やその体制整備を支援。

支援対象期間：平成26年度より5年間

支援対象学校：国公私立高等学校及び中高一貫教育校（中等教育学校、併設型及び連携型中学校・高等学校）

支援規模：1校あたり2,900万円、平成26年度は100校を指定（予定）



スーパーグローバルハイスクール (SGH)

平成26年度 100校を指定(予定)

【主な取組】

- ・ 人文科学・社会科学分野の先進的な教育課程の開発・実践(教育課程の特例の活用を想定)
- ・ グループワーク・ディスカッション、調査研究・論文作成・プレゼンテーションの実施(英語によるものも含む)
- ・ 国際的素養を身に付けたグローバル・リーダーの育成を図る指導方法の研究・蓄積
- ・ 帰国・外国人生徒の積極的受入
- ・ 海外研修など海外の高校・大学との交流機会の充実
- ・ 外国人教員の活用(「新・お雇い外国人教師」)

【大学との連携】

- ・ 人文科学・社会科学分野の教員や、帰国・外国人教員の派遣
- ・ 入試の改善による生徒の学習内容の適切な評価
- ・ 単位認定を含む高大連携プログラムの提供



国際機関職員、社会起業家、グローバル企業の経営者、政治家、世界的な人文・社会科学の研究者、大学教員等の輩出

<取組の概要>

- ・学生たちが高校から大学への環境変化にスムーズに適応し、自発的・能動的に学ぶ意識を育てることを主眼とし、さらにその方法論を4年間の大学教育(学士課程教育)全体に継続的・発展的に展開しようとするを目的としたもの。
- ・取組の実施にあたっては「初年次教育研究開発センター」を中心に独自の教材や教育手法を開発し、その情報とノウハウの学内共有化を推進。
- ・教育手法の改善として、従来の一方向的な講義形式にとられない、学生参加によるグループワークの実践などを主体とした「アクティブ・ラーニング(Active Learning)」の手法を全学的に導入し、その結果、学生自身の積極性や参加意識が向上するとともに、「学び」を核とした大学生活への適応力が向上。

<具体的な取組>

以下の1～4の取組を実施。

1. 入学前教育

初年次教育プログラムは、入学予定者を対象とした「ウォーミングアップ学習」とよばれる入学前教育から開始される。これは、大学生活に対する不安を軽減するとともに、大学で必要な学習技術を学ぶことを主な目的としている。(毎年行う実施後のアンケートでも「大学生活への不安がなくなった」との評価を得ている。)



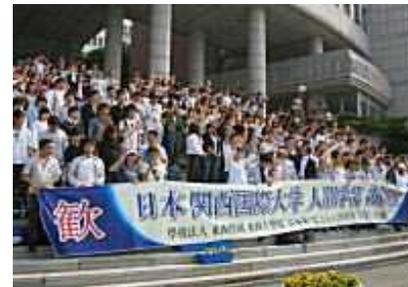
2. 初年次教育カリキュラムの充実

入学直後の春学期に、初年次教育プログラムの核として、「キャリアプランニング」「学習技術」等を開講し、4年間の学士課程の基礎となる知識やスキルを修得。(本取組の中で作成されたテキストは他大学でも使用されている。)



3. 海外研修プログラム

「キャリアプランニング」の一環として、新入生対象の海外研修プログラムを行い、課題解決型のフィールドスタディを通じ、「自律性」と「国際性」の促進を目指す。人間心理学科・教育福祉学科は韓国、英語コミュニケーション学科はオーストラリアでの研修を実施。毎年、1年生のほぼ全員が参加。



4. ポートフォリオの活用

全学生の一人ひとりの自己分析結果やレポートなど、自分自身の学習成果を統合的にファイルした「個人ポートフォリオ」を作成し、4年間の学生生活を通して活用。これによって、常に自分の目標管理と学習到達度の確認が可能。



大学教育と高校教育の連携の例①（お茶の水女子大学） （大学レベルの教育を高校生向けに提供している例）

お茶の水女子大学と附属高校の連携により、①「教養基礎」科目の設置、②附属高校生向け公開授業、③「選択基礎」科目の設置・特別入試の実施等の「高大連携特別教育プログラム」を実施。

◆「教養基礎」科目（高校）

- ・国語、数学、英語のカリキュラムを大学・高校教員の連携のもとに研究・開発し、学校設定科目として「教養基礎」科目を設置。附属高校、大学教員の双方の研究・協力により授業を実施。
ex.) 教養基礎『国語』Ⅰ・Ⅱ、教養基礎『数学』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 等
- ・高校1・2年生が必修、3年生は選択制。

◆附属高校生向け公開授業

- ・平成16年度よりお茶の水女子大学の一部の授業を附属高校生に向けて公開。
- ・大学生と同様に試験等を受けることにより成績が評価され、認められれば修了証書が交付される。
- ・高校の単位にはならないが、お茶の水女子大学に進学した場合は、申告により所定の手続きを経て単位が取得できる。
- ・平成25年度は、約30の授業科目を公開科目に設定。

◆「選択基礎」科目・特別入試

- ・お茶の水女子大学の特別入試受験を前提として、高校3年生が大学の学科等（学科、講座、コース等）を選び専門の基礎教育を受ける。
- ・取得した単位は、お茶の水女子大学進学の場合には、入学後、大学の単位として認定可能。
- ・附属高校生を対象とした「高大連携特別教育プログラムに基づく特別選抜」を、本プログラムの履修生に対する追跡調査のため、平成20年度入試から実施。募集人数は若干名（10名程度）。

大学教育と高校教育の連携の例②（教育ネットワーク中国） （大学レベルの教育を高校生向けに提供している例）

- ・大学の授業科目の高校生への公開を通じて、高校生が大学の高度な教育・研究に触れ、高校教育と大学教育の円滑な接続に資することを目的として平成14年度から開始（大学入学後単位が認定される科目等履修生制度も平成19年度から実施）。
- ・大学の正規の科目を受講できる公開授業と高校生のためにデザインされた公開講座、教育ネットワーク中国が中山間地域の高校長協会等の協力を得て開設している中高大連携公開講座・遠隔授業などが行われている。
- ・平成24年度は公開授業に62名、公開講座に1,459名、中高大連携公開講座に1,393名、遠隔授業に130名の高校生が参加（延べ履修者数）。

◆実施主体

「教育ネットワーク中国」

中国地方の大学・短期大学・教育団体などで構成する連携組織。
単位互換・生涯学習・高大連携などの事業を展開。

◆対象高校

広島県内の公立・私立高等学校および広島大学附属高等学校に在籍する生徒。山口県岩国地区の県立岩国高等学校、県立高森高等学校、高水高等学校に在籍する生徒。

◆提供大学

中国地区を中心とした、約22の大学、短大等。

科目等履修生制度

- ・高等教育を受けるのに十分な能力と意欲を持つ高校生が科目を履修するだけでなく、単位の取得ができるようにした制度（一部の大学において実施）。
- ・進学したい学部や大学の講義の受講・単位認定を通じて将来の進路選択を今まで以上に明確化することが可能。
- ・大学入学後、大学の判断により、単位の認定が行われる。

（「教育ネットワーク中国」ホームページより作成）

<高校生のためにデザインされた公開講座>

- ・大学の正規の科目の他に高校生のためにデザインされた講座を設置。

<「公開講座」の例> (2012年一次募集科目)

大学・短期大学名	学部・学科	科目名
比治山大学	現代文化学部 社会臨床心理学科	心理学を体験する
広島工業大学	工学部・都市デザイン工学科	ICT技術で江戸時代にタイムスリップ
広島国際学院大学	工学部総合工学科	環境の科学と技術の体験
	工学部総合工学科	コンピュータを利用するものづくり (CAD/CAM)
	工学部総合工学科	生きた生物で美味しく健康な食生活 ～ヨーグルトはすっぱい乳酸菌、パンは風味豊かな酵母、納豆は？～
広島大学	医学部	先端医療は今ー広島から世界へ2012
広島文化学園大学	看護学部・看護学科	高校生のための看護学入門
広島文化学園短期大学	保育学科	保育のためのピアノレッスン 保育系をめざす人のためのピアノレッスン
広島都市学園大学	健康科学部 看護学科	基礎看護技術学ーフィジカルアセスメントー

<「学習記録」の作成>

・大学の公開授業を受けるにあたって、自己評価など個人の学習記録を記入し、大学の講義を学んだ記録として活用。

・一部の授業において、実施講義終了後、担当教員がコメントを付した上で返却。生徒の学習意欲の向上に役立てる。

<「学習記録」の例>

教育ネットワーク中国 高大連携学習記録 (No.)		作成日	年	月	日
氏名		担当教員から			
高校名		大学名			
高校入学年		担当者			
		記入期日	年	月	日
<公開授業の記録>		担当者の評価 (評価できる点、今後努力して欲しい点などを書いてください)			
	受講者から				
大学名					
履修した科目名					
担当者					
受講した年	年	前期	後期	集中	
受講者の自己評価 (大学の講義を受けて何を学ぶことができたのか、今後努力していきたいことなどを書いてください)					
		高校教員から一言			

SSHにおける高大連携の事例について

理数系教育に関する研究開発を行う高等学校及び中高一貫教育校を指定する「スーパーサイエンスハイスクール(SSH)」については、「特に期待される研究開発テーマの例」の一つとして、「高大接続の開発」を挙げている。SSHにおける高大連携としては、例えば、以下のような事例がある。

横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校 (YSFH)

◆ 大学教員による学校設定教科「サイエンスリテラシー」等への支援

- YSFHの学校設定教科である「サイエンスリテラシーⅠ～Ⅲ」(研究者による指導のもと、自ら課題テーマを設定し探究方法を考案し探究活動を行い、積極的に発表や交流を行う)において、1年次から、週1回、95分授業において、科学技術顧問でもある大学の教員や研究所の研究者から、直接講義や実験の指導を受ける。
- ※ 1年次の「サイエンスリテラシーⅠ」・2年次の「Ⅱ」は必修。3年次の「Ⅲ」は選択科目。

◆ 横浜市立大学チャレンジプログラム

- 横浜市立大学と横浜市教育委員会は、教育連携に関する協定の理念に基づき、横浜市立横浜サイエンスフロンティア高校の第1期生から、横浜市立大学国際総合科学部理学系への特別入学枠(10名程度)を設定。
- 3年次の選択科目であるサイエンスリテラシーⅢの取組などを総合的に評価し、合格者を決定。
- 合格した生徒に対しては、横浜市立大学教員及びYSFH教員が、横浜市立大学講義の聴講を含む各種入学前教育を通じて継続的に指導。
- ※ この入学前教育は、横浜市立大学大学院修士課程までを5年で終わることのできる「YCU型高大院一貫科学者養成プログラム」に含まれる(YCU: Yokohama City University)。

<参考:「YCU型高大院一貫科学者養成プログラム」の流れ>

YSFH在籍時 入学前教育、個別指導の実施

横浜市立大学学部3年次終了時 一定の基準を満たした学生に対し、大学院科目を早期履修する権利を付与

大学院進学後 前期課程を1年で終了することが可能。2年目は、博士後期課程に進学するコースと、前期課程2年次をより高度な研究活動に発展させるコースに分け、学生の多様な将来像に適応させた教育を実施

入学準備教育に関する取り組み事例(帝京大学)

- ・大学で学ぶ意義を理解し、主体的に学ぶ姿勢を身につけることを目的として、帝京大学の一部の学部、短期大学のAO入試及び推薦入試の合格者を対象に平成26年度入学予定者から入学準備教育を実施。
- ・対象者はインターネットを利用して全講義12回の中から必須の2授業とその他3つの授業(合計5つ以上)の授業映像を視聴し、ポートフォリオを提出。その後、希望者はさらに理解を深めるために「フリップトクラスルーム(反転授業)」に参加可能。

1. オンライン映像授業による入学準備教育

- ・一部の学部、短期大学のAO入試及び推薦入試による入学予定者を対象に、オンライン映像授業による入学準備教育を実施。講義映像には、正課科目として開講している「帝京学」の授業を使用。
＜「帝京学」＞
→各学部・学科から選ばれた教員が、それぞれの専門分野を通して帝京大学で学ぶことの意義を説明。「大学での学びとは何か」「どのように学問と向き合っていけばよいか」といったテーマについて、毎回取り上げる。
- ・対象者は、全講義12回の中から必須の2授業とその他3つの授業(合計5つ以上)の授業映像を視聴し、大学にポートフォリオ(※)を提出。

(※)ポートフォリオ
受講者が学習過程並びに学習成果等を記録したもの。

◆オンラインで提供される「帝京学」講義一覧

所属学科	授業内容
学長	帝京大学について学ぶ【必須】
経済学科	経済学科で何が学べるのか？
経営学科	経営学の学びとは、失敗を学ぶこと
法学部	クラブ襲撃事件と刑法【必須】
日本文化学科	日本の師友たちと知りたい、守りたい
史学科	八王子キャンパス周辺の歴史と現在
社会学科	社会学って何？若者ってどんな人？
心理学科	認知心理学の認知症への接近
外国語学部	英語史の旅
初等教育学科	読書力が未来を拓く
スポーツ医療学科	健康と体力について
総合教育センター	真の「国際性」に向けて

2. フリップトクラスルーム(反転授業)による入学準備教育

- ・AO入試による入学予定者のうち希望者を対象に、オンライン映像授業による学習内容をさらに深めることを目的とした「フリップトクラスルーム(反転授業)」(※)を実施。

(※)フリップトクラスルーム(反転授業)
予め授業を映像で受講し、その後に対面式の授業でディスカッションなどを行うもの。米国で2000年代から急速に広がった教育手法。